

キャン ドウ

CanDo アフリカ

特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会(CanDo)会報 2014年12月[第69号]



活動の方向性

ナイロビ便り

ひと

ひと

ケニアでの活動

フォト・レポート

事務局から

ナイロビ・スラムでの補習授業の終了について

公共交通の利用

新スタッフの自己紹介

インターンを終えて

2014年9～10月

キツイ地方ミグワニ県での3年2か月の活動から

永岡 宏昌

今村 純子

泉田 恵子

浅利 有紀／北代 真理／金井 良樹

ナイロビ・スラムでの高校生への補習授業の終了について

代表理事 永岡 宏昌

1998年に当会を設立した時の関係者・支援者の多くは、ナイロビの工業地帯にあるムクル・スラム群の1つ、ルーベン・スラムに関わりがありました。私自身、前職のNGOでは、毎日通って、社会開発の活動に取り組んでいました。目の当たりにした貧困状況の中で、住民が力強く生きていること、さまざまな教会やNGOが競争のように与える援助から、住民は選択していることもわかりました。そのような環境で、住民は援助者との駆け引きや、住民間で自分の利益を大きくする駆け引きなどの技能を向上させてきたのだ、と理解しました。ケニアで当会が活動を開始するにあたり、駆け引きが少ない環境の中で、日本人スタッフが住民と一緒に、着実な開発協力を進めたい、と考えて、村落部の半乾燥地ムインギを事業地に決めました。

ルーベンでは1997年12月、前職のNGOが、実施していたスラム出身の高校生への奨学金供与を中止しました。1998年は有志が奨学金への募金を呼びかけて、当会で運営を担い、1999年、奨学金供与、および学校休校期間中の奨学生への補習授業を活動として行ないました。授業は、ルーベン出身で、何らかの援助を得て大学に通っている学生が、講師として参加しました。評判

がよく、ルーベンおよび近隣のスラムに暮している高校生からの受講希望があり、2000年には補習授業の対象を、ムクル・スラム群全体の高校生にしました。同年12月、奨学生の卒業をもって、奨学金供与は終了しましたが、授業は継続することにしました。講師は、受講した高校生から大学に進学した学生が引き継ぐ形ができました。

当初は、スラムに日本人スタッフが入って講師たちと関わっていたのですが、次第にその治安状況が悪化しました。最近では、講師との打ち合わせは、当会ナイロビ事務所などスラムの外で行なう「遠隔運営」の形になりました。講師が会場を確保して、会場費の支払い・領収書の取得、補習授業の広告、高校生からの授業料の徴収、授業の実施と報告を行なうことになりました。自律的な運営は目指していたことでしたが、残念ながら、明らかな不正が見つかりました。日本人スタッフが現場に入らずに是正し、今後の不正を予防することは困難であり、また、安全上のリスクをとってスラムに入ることはすべきでない、と判断しました。少額の自己資金による活動ですが、不正の継続は当会の方針に合わないと考え、2014年4月の補習授業をもって、活動を終了しました。

公共交通の利用

調整員 今村 純子

11月24日朝6時前にナイロビ事務所近くで、バスがコントロールを失い、マタウ(小型バス)と衝突して、3名が死亡する交通事故が発生しました。業務でのレンタカーと合わせて、公共交通のバス、マタウを私たちは移動手段として使用しています。その事故はよく起こっていますが、ふだん歩いている道での事故には、ショックを受けました。

公共交通に乗りしていると、スピードを出しすぎたり、路肩を逆に走り抜けてきたり、危険を感じるがよくあります。レンタカー会社の運転手によると、車両の整備、制限速度や左側通行の徹底などは、保険の加入とともに法律で定められているそうです。例えば、制限速度は、一般道路で時速50km以下、高速道路では時速80kmから100km以下。走行する道路に関わらず、バスやマタウは時速80km以下となっていて、車両に「80km以下」というシールを張ったり、80kmを超えると「over speed」と表示がされるメーターを搭載したりしているバスやマタウも一部あります。

ケニアでは、日本に比べて道路に設置されているバンプ(隆起)が多く、スピードを出して走行できる区間は短いように感じます。アフリカ開発銀行と中国の出資により2012

年に完成した、ナイロビ-ティカ間の片側4車線の広い高速道路をマシガ県への往復で走る際、レンタカー会社の運転手はバンプで停車寸前くらいに減速します。それでも高速道路でスピードを落とすたくない運転手が多いのか、長距離バスを含めて交通事故をよく見ます。公共交通を利用するには、交通事故の危険性だけでなく、車内の安全性も問題で、スリによる被害はよくあることです。また、タクシーでも変わりませんが、渋滞のことも考えなくてははいけません。事務所から町の中心街へ出かけると、問題がなければ30分で到着するところ、朝夕の通勤時間帯では2時間かかったりします。

しかし、公共交通の中でもマタウはいろいろと利点がある交通手段です。道路沿いに立ち、運転席の前に置いてある行先の看板を目印に手を上げると、どこでも乗車できます。ヤギ、鶏、バイク、私たちが学習会で黒板代わりに、クラフト紙をはって使用する板も一緒に運べます。最近、ベッドを購入した乗客のために、路線を外れて家のそばまで運んでいるマタウに乗り合わせました。地域の人びとの必要性に応じた交通手段として、日々新しい発見ができるマタウに乗車することが楽しみです。

ひと 新スタッフの自己紹介

調整員 泉田 恵子

開発に興味はあったものの、大学卒業後、無縁の環境で接客や保育等に携わり十数年を過ごしました。昨年夏、未経験でも応募できるインターンの公募を見て志望をし、インターン、短期スタッフを経て、今年8月より調整員として仕事をしています。私がインターンとして派遣された昨年10月はマシंगा県での事業が始まった月で、インターン期間中は、主に事業地の調査(行政官、保健施設、学校訪問等)に参加。プロジェクトの開始に関わったことはとても貴重な経験でした。

現在は主に保健分野を担当し、連日起こる大小さまざまな問題を前に、ケニア人スタッフ、インターンの人たちと共に悪戦苦闘の毎日です。

そんな私の最近の楽しみは、現場で「ウジ」(ヒエのおかゆを発酵させたもの)を食べること。いろいろな店に行って、ウジばかり注文しています(無いことも多いのが難点です)。まだまだ力不足ですが、1つ1つの仕事に丁寧に取り組んでいくつもりです。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

ひと インターンを終えて

見ることができた公衆衛生官の取り組み方の変化

浅利 有紀

2014年3月に派遣され、地域保健ボランティア(CHW)研修を担当した。村長老やリーダーを集めた会議、最初の準区の村ごとの受講者選出の会議、公衆衛生官をはじめ協働する保健局の役人と内容を詰める会議に参加、8月の研修の第3週まで活動した。

まず報告書、書類作成に手間取った。スタッフとの会議の長さにも驚いた。しかし、地域の背景や活動の意義について考え、方向性を決める手順は必須だと知った。

活動を通して、公衆衛生官の取り組み方

の変化を一番近くで見ることができた。最初はモノや日当が得られるか、の話が多かったが、だんだんと村訪問の意義に理解が深まり、その結果14村のほとんどに同行してもらえた。このことは、かつて別のNGOが多額の予算で活動していた地域という観点からみると驚くべきことで、地道な活動が地域保健の質の向上につながることを理解してくれたからだと思う。地域密着型の開発協力の難しさとやりがいを感じられた。大いに成長できた半年間だった。

インターンを通して学んだ社会開発の評価の難しさ

北代 真理

2014年3月から半年間、インターンとして地域・学校保健事業を担当し、地域のエイズ・リーダー研修修了者へのフォローアップ会議や、学校教員へのエイズ研修及び早期性交渉(妊娠)予防研修の実施に携わった。

大小さまざまな仕事や現場で相次ぐトラブルの対応に追われながらも、問題意識として抱いていたのが事業の有効性と持続性、そしてその評価方法である。一般に、社会開発の成果を数値化して評価することは難しいとされる。派遣中の4月に事業終了を迎えたミ

グワニ県の活動報告書執筆の一部を担当した際、研修の参加者や修了者の数以外で、地域へのインパクトをいかに正確にドナーに伝えられるかが難しく、評価の困難さを実感した。

研修を受けた住民や教員が口を揃えて「役立った」、「積極的に地域に広めたい」と発言をする中で、いかに正しく成果をとらえ、評価し、高めていけるか。今後も社会開発分野に携わることを志向する者として、その重要性を学べた意義深い6か月であった。

苦難に満ちたインターン生活と見えてきたNGOの課題

金井 良樹

2014年3月10日、アフリカ大陸の荒野を上空から眺めるうち、後に引けないのだという気持ちと飛行機の閉塞感で軽いパニック状態に陥り、元から僅かしか無かった自信は完全に消え失せた。

ケニアに到着すると、インターン業務は機内以上の閉塞感と予想を超えた仕事量で私を歓迎した。前任者が帰国した際の喪失感と無力感は途方もないものだった。日々の業務は何とか習得したもの、イレギュラーな事態に対してそれを正確に把握して報告することは難しく、ミスをする度に自分の神経が擦り減る音が聞こえた。

しかし、半年間を振り返ってみると、建設・環境担当として保護者の力を引き出しながら事業を実施する過程に参加できたことは大きな喜びであったし、境遇が異なるスタッフやインターンとの交流からは大きな示唆を得た。

また、最も衝撃を受けたのは資金面・人材面での困難に直面するNGOの現状と、市民参加や協力といったNGOに対して持っていたイメージとのギャップであった。この経験を踏まえ、今後は非営利組織のマネジメント分野での研究・貢献ができたならと考えている。

ケニアでの活動

—2014年9～10月

■ マチャコス地方マシंगा県

- ◇小学校—学校運営能力向上と施設拡充:
・2校で、作業に入る「覚書2」を締結。1校で、柱の印付け作業まで進んでいます。
・国会議員選挙区開発基金(CDF)と協力する方向を県公衆衛生官に伝えました。CDF資金で補修された教室について、専門家との調査結果をCDFに報告。
- ◇小学校—環境活動: 1校で、現地資材に関する学習会を開催。
- ◇小学校—保健: 1教育区で教員へのエイズ教育研修(第1課程)を実施。

- ◇幼稚園—保健: 保健研修: 2教育区で、教師への保健研修(理論編。3日間)を実施。
- ◇地域—保健:
・マシंगा区ムクス準区で地域保健ボランティア(CHW)研修の第4週、保健施設での実践研修を参与観察。理論研修の補習、記録と記録法に関する研修を実施して、全ての研修を終了。
・キバー区イーア二準区で地域リーダーへの保健とリーダーシップ研修を実施。準区の2村の住民集会で、CHW研修を受講する候補者を選出。

現在、スタッフ、インターン、専門家として、31人が活動にかかわっています

ケニアで28人

- ◇調整員: 5人
西岡 宏之—管理/泉田 恵子—保健/今村 純子(短期)—施設拡充・環境
カンダリ・ムロンジャー—事業全体/レンソン・ムタンギャー—施設拡充・環境
- ◇調整員助手: 9人
エスタ・ンドウ/グレース・ティタス/パトリック・マサイ/ジャネット・マカウ/ジョサイア・キトンガ/レベッカ・ムワンガンギ/フレドリック・ザンギ/エドナ・ムウイカリ/ピーター・カランバ(非常勤)
- ◇インターン: 3人
高畑 晃/濱野 聖菜/内田あす香

◇専門家: 11人

- ・ミルカ・カワシア・ゾビ/ベンジャミン・カムティ/エリザベス・グリ/ジェイムス・キズク/ジョゼフ・マルキー—保健
- ・マーガレット・ムトゥンガ/クリスティン・ダイナー—教育(学校保健)
- ・フランシス・ムエンドワ/キエマ・ムワンガンギ/ガブリエル・キエンゴ—施設拡充
- ・トーマス・ムシラ—環境

日本で3人

- ◇代表理事(兼 事業責任者): 永岡 宏昌
- ◇事務局長: 久保内 祥郎
- ◇事務局員: 佐久間 典子

フォト・レポート

キツイ地方ミグワニ県での3年2か月の活動から 2011/3/1～2014/4/30

小学校の施設拡充 —教室建設



—教室の構造補修



—教室の基礎保全



小学校での環境活動 —土壌保全 他



小学校での保健 —教員へのエイズ研修



—早期性交渉予防 (保護者への研修)



—早期性交渉予防 (子どもへの保健トーク)



幼稚園での保健 —保護者による保健活動



地域での保健 —エイズ・母性保護学習会



—基礎保健研修



—エイズ・リーダー研修



—エイズ・リーダーによる エイズ学習会の促進



事務局から

報告

◇支援

○11月4日、(独行)国際協力機構(JICA)の「NGO向けアドバイザー派遣制度: NGO組織強化のための国内アドバイザー派遣」により、(株)ジャングル・コアの「支援者拡大に向けた、広報戦略の達成」の指導が開始。2015年2月下旬まで。

◇国内活動

○10月4日、5日、東京・日比谷公園で開催されたグローバルフェスタJAPAN 2014に出展(台風のため、5日は12時で終了)。

○10月19日、早稲田大学の稲門祭で、パネル展示。

人の動き * 派遣・出張先はケニア

○10月3日、高畑晃(たかはた あきら)、5日、濱野聖菜(はまの せいな)、10日、内田あす香(うちだ あすか)を、インターンとして派遣。

○10月20日、代表理事(兼 事業責任者)永岡宏昌が出張から帰国。

○11月13日、調整員 西岡宏之が一時帰国。12月7日、再派遣。

お知らせ

CanDo では年4回発行する会報『CanDo アフリカ』のほか、次のようにケニアでの活動や生活、勉強会の情報などを伝えています。ぜひ、ご覧ください。

■facebook ページ

永岡が出張中に撮影した写真が中心です。

<https://www.facebook.com/candoafrica>

■ブログ「CanDo news」

ケニアでの活動の月間報告と、facebook の写真を2枚取り上げた写真便りなどを投稿。

<http://cando-africa.cocolog-nifty.com/blog/>

■会員の方を対象に今年、「CanDo メール・ニュース」を始めました。メール・アドレスを事務局で把握していない方には送信していないので、受信をご希望の方はご連絡ください。

CanDo アフリカ [第69号]

2014年12月18日発行

発行人: 永岡宏昌

編集人: 佐久間典子

発行: 特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会 (CanDo)
〒110-0001 東京都台東区谷中 2-9-14 第2森川ビル B号室

電話/FAX: 03-3822-1041

電子メール: tokyo@cando.or.jp

ウェブサイト: <http://www.cando.or.jp/>

郵便振替: 口座番号 00150-2-15129 加入者名 アフリカ地域開発市民の会